

# 学ぶことが生きることの証と喜びになる

## ― 自主夜間中学から考える教育の権利

白倉 汎子

### ◇ 教育からの疎外は基本的人権の侵害

夜間中学はなんであるか

どうやってつくったか

げんいんはだれがつくったか

ぼくはしりたい

(松崎運之助著『夜間中学の歴史』からの引用)

ご存知ですか? 「自主夜間中学」が全国に三五校、北海道に四校あることを。みなさんはこの詩の問いかけに答えられますか?

教育権は制度的には日本国憲法と教育基本法で保障され、子どもの権利条約でも学習権が保障されているものの、実態としては、義務教育未修了者が全国で一〇〇万人、北海道だけで一〇万人いるといわれています。

学ぶ権利を奪われてきた人々にとつての日常生活は、文字と言葉を奪われただけでなく、健康で文化的生活を営む権利も、自己を生きる「基本的人権」も奪われていると言つても過言ではありません。教育から疎外され、生活をおびやかされてきた人々にとつては、「義務教育はすべての人々

の前に平等に開かれていなければならない」という理念は未解決のままだと言つてもよいでしょう。

### ◇ 一〇代から八〇代まで、札幌遠友塾に集い学ぶ受講生たち

札幌遠友塾自主夜間中学は、戦中・戦後の混乱期に貧困・病氣・差別などで学校に通えなかった人、形式的卒業者の「学びの場」として一九九〇年に設立され、二〇一二年で三十二年目を迎えました。現在、七八人の受講生と八〇人を超えるスタッフが、毎週水曜日の夜、向陵中学校(札幌市中央区)に集い、一学年から三学年までの三クラスと、個別指導が中心のじっくりクラスに分かれて、国語・数学・社会・英語の四教科を学んでいます。三年間で中学一年のレベルに到達することをめざしています。スタッフ作成のプリントが教科書で、国語は「びらがな」、数学は「たしざん」、英語は「ABC」、社会科は地図の見方から勉強します。水曜日の夜の校舎玄関は、「こんばんは」の挨拶が飛び交い、賑やかな笑い声が二階の教室につながっていきます。廊下ですれ違う向陵中学の生徒とも「こんばんは」「お疲れさま」の声で交流

しあう、正に「教育の実在」の場です。学びたくても学べなかった人たちが、時を経てようやく教育権を手にし、自己を高め夢と希望に向かう場です。授業の合間に机を撫でている高齢者の手は年齢を刻んでいます。穏やかな笑顔が「学校」への喜びを表しています。

一人ひとりの受講生には背負ってきた歴史があります。教育差別と貧困はつながり、そこには「戦争と平和」の問題も見えてきます。受講生たちの発言から、その実例をご紹介します。

「家が貧しくて学校に行けず、弟をおぶつて小学校の窓の下で、授業を聞いていた」、「病氣になり病院に行ったが『受付』という字が読めず困った」、「区役所に行ったが字が書けないとはいえず、職員をだまして書いてもらった」、「戦後の混乱の中、家業を手伝いほとんど学校に行けなかった」、「小学校に入学したものの、病氣がちで学校に通えず、小学校の卒業証書もない」などと語る中、高齢者。一方、「小学校でいじめにあい家に閉じこもった。いつか高校に行きたい」と希望を話す若者。「日本に住み続けるためには日本語が必ず」と語る新渡日の女性。

一〇代から八〇代の受講生は、学びに対する積



水曜日の夜5時半過ぎ、札幌校舎玄関は、「こんばんは」の挨拶であふれる。

極性とお互いへの思いやりで、励まし合い、支え合いながら学んでいます。家族のような雰囲気です。新渡日者は、世界地図上で出身国の風土や文化を語り、仲間は言語の多様性や異文化への視野を広げています。

毎年、卒業生の中から三〜四人が通信制や定時制高校へ進学し、「一〇〇点とったよ」、「頑張って飛び級したよ」、「四年のところを三年で卒業したよ」などと、笑顔で知らせてくれます。遠友塾で元氣を取り戻し高校へ進学した青年が、背丈もぐ〜んと伸び、ニキビ真つ盛りの顔で訪れ、高校で部活動も楽しんでいると話してくれました。

「学びたくても学べない」時も「学びたい」という意志を持ち続けた人たちが、ようやく学ぶ機会を手にし、「遠友塾は通過点」と、目的に向かってさらに前へ進んでいく。その姿にスタッフも多くを学んでいます。相互学習の実在の場にあつて、「教育は共育」であること、学習はその時が「旬」と考えるのです。

### ◇ 学ぶ喜びの共有、学習権の回復めざしてこれからも

札幌遠友塾の受講料は月額一〇〇〇円で、その運営費は、受講料年一〇カ月分と賛助会員会費、寄付金、助成金による年間収入約三〇〇万円で購入されています。主な支出予算は、会場費二〇万円、教材費五〇万円、保険料、事務費、会議費、通信費、卒業文集作成費、スタッフに一回一五〇円支給される活動補助費などです。年間計画には、入学・卒業式、遠足、三年生とじつくりクラスの社

会見学、クラス発表、忘年会などがあります。

二〇一一年一〇月に実施した遠足は新札幌の青少年科学館でした。初めて訪れた人たちは、プラネタリウムで宇宙の神秘と天体の広がり魅せられ、降りそそぐ流星を見上げているうちに心地よいひと時に誘われました。「大雨の日の遠足が屋内施設でよかった」などの感想が寄せられ、みんなが満足した一日でした。

また、道内には、札幌のほか、釧路、旭川、函館にも自主夜間中学があり、四校が集まった「生活体験発表会」も二〇一一年で活動二年目を迎えました。同じく一〇月に札幌で開催された第二回発表会では、六人が発表を行い、「孫への手紙」「遠友塾での学び」「私のあしあと」などのタイトルで、幼いころの家庭の事情などを発表しました。我慢してきた勉強の場に戻れて「これが自分なんだと



第2回生活体験発表会。学びへの意欲と喜びを全道の自主夜間中学生が発表。

胸をはって言える今が幸せ」、「習っても忘れてしまふことが多いけれど、学ぶ楽しさを知った」などと語られるなか、参加者全員が学ぶ楽しさや喜びを共有していました。

自主夜間中学が戦争・貧困・障がい・差別の中から生まれてきたことを考えると、これを必要としないするには、平和な社会を構築することが条件になります。それまでは、必要とする地域での設立、公立夜間中学の設立、公費の助成などを願い、求めていきます。

「教育権の当事者」は、学習権の回復を求める人たちと子どもたちです。戦争、貧困、差別、形式卒業、点数学力、病欠、不登校…。自分の責任ではないのに教育から切り棄てられる人々に、生きる権利・教育権の回復を願います。そして、周りにいる私たちにも「人権意識」の呼び覚ましが必要ではないでしょうか。最後に、夜間中学生の詩を一篇紹介します。

美しいという字、なんて美しいんやろ。先生、手のひらに書いてジイット握りしめて家に帰りましてんねん。

#### 白倉汎子（しらくら ひろこ）

札幌遠友塾自主夜間中学スタッフ。全林野労働組合員・主婦会員時、国有林現場労働の過酷な実態と日雇い・臨時・期間・正規等の雇用形態の在り方に疑問をいだく。現在は、札幌遠友塾自主夜間中学のほか、民主教育をすすめる道民連合、I女性会議などにも関わる。常に「小さき人」を心に、気持ちがつながるところで活動を続ける。